

六五七八〇（次行。六五八二一八三は訂正後の文を抹消して復元）

「塊岐邪曲」然り而して地體は塊然たる一球なり、天行の其の理を岐するに於て異なる、

六五七八一（復元）天體は混焉たる一氣なり、地體の其の表を塊にするに於て異なる、故に

六五七八二（復元）天なる者は混圓中、岐して其の理を横豎にす、

六五七八三（復元）地なる者は一塊表、斜に其の形を岐岐にす、故に

六五八四 象質の行は、衡従本末を分つ、

六五八五 山壑の體は、拗突邪曲を分つ、

*六五八六 天轉地持は、物の體を爲す、

六五八七 水燥日影は、性の物を爲す、

六五八八 體物は露地に居る、

六五八九 性物は没地に居る、故に

六五九〇 象も亦た直圓を成す、而して規矩を天地に分つ、

六五九一 質自から俯立を爲す、而して直圓を天地に合す、

六五九二 氣體は直圓を以てして立つ、

六五九三 象質は横豎を以てして成る、

六五九四 性は則ち會易なり、

六五九五 體は則ち氣物なり、而して

六五九六 會易と氣物と。各おの同じく天地萬物を具す。

六五九七 氣物を以て會易を統ぶれば、則ち中外を一にして、而して彼此混成す、

(I 449b)

(PB 432)

六五九八 會易を以て氣物に比すれば、則ち中外を各にして、而して彼此粲立す、是を以て

六五九九 體に成る者は天地なり、

六六〇〇 性に成る者は日影なり、

六六〇一 天地なる者は天轉地持なり、

六六〇二 日影なる者は氣收象發なり、

六六〇三 日象影氣、下は水質燥氣と偶す、故に

六六〇四 日影は天地と勢を張ると雖も、而も

六六〇五 影は收め日は發し、而して日は弧中に居りて、地外を繞る、

六六〇六 水は潤い燥は煦め、而して水は弦中に就きて、地表に浮く、

六六〇七 華は天間に充つ、

六六〇八 液は地表に漾う、

六六〇九 象質は各、其の氣に偶して。會易の物を見ず。

六六一〇 然りと雖も水燥は天地に合し、

六六一一 日影は天地に比すれば、則ち日影は能く天地と勢を張る。是に於て

六六一三 天中の萬物は、日影を得て繋る、

六六一四 持中の萬物は、水燥を得て列す、

六六一五 網縷摩盪して。上は則ち星辰を懸け、其の行を日影の間に於て衡從にし、以て能く循環す、

六六一六 下は則ち動植を化し、其の體を水燥の間に於て俯立し、以て能く鱗次す、是に於て

六六一七 動植の物は、形を塊岐に資り、愈いよ其の塊岐を變ず、

六六一八

六六一九*

六六二〇*

六六二一

六六二二

六六二三

六六二四

六六二五

六六二六

六六二七

六六二八

六六二九

六六三〇

六六三一

六六三二

六六三三

六六三四

六六三五

行を邪曲に資り、愈いよ其の邪曲を變ず。

蓋し形位は成具に成る。

小物は大に資りて。以て別に天地を開く。是を以て

直圓は理形の正に於て出づ、

邪曲は理形の變に於て極す、

正は直圓規矩を有す、

斜は塊岐邪曲を有す、

塊なる者は岐せずして、而も未だ正圓を得ず、

岐なる者は塊せずして、而も未だ正矩を得ず、故に

天の運する所は、其の行を岐にす、

地の立する所は、其の體を塊にす、

星漢は最も高く、其の行は東規に循う、

日月は最も卑く、其の行は東規に岐す、

塊塊の間。天形は正圓にして、

水燥は漸之を假る、

地形は拗突を以て文章を爲す、

望遠鏡の窺う所。日月の體は。文章を有すこと地の如し。是に於て

天象と雖も。而も漸みて已に地に近ければ。則ち

日月は其の體を塊にす、

(PB 433)

(I 450a)

六六三七 * 其の行を岐にす、其の體を塊にし、其の行を岐にすと雖も、

六六三八 地中の塊岐と同じからざる者は、天地の大方なり。故に

六六三九 輪軸既に設け。方處既に定まる者は。形の斜なり。

六六四〇 斜中に之を分てば。西規北矩、高を以てして正なり、

六六四一 東規南矩、卑を以てして斜なり、

六六四二 * 日體は塊然として、其の行は又た盈縮の輪を架す、

六六四三 * (復元) 月體は塊然として、輪外に遅疾し、輪輪相い架す、

六六四四 * (復元) 日に著くの諸辰は。皆輪 輪を架く。

六六四五 * 各 自から機軸を持して。星漢の脈絡を通ずるに異なるなり。

六六四六 * (復元) 唯だ月の最も岐行の多きは。最も地に近きを以てなり。

六六四七 * 斜なる者は地物の形理なり。地中と雖も。

六六四八 * 天に親なる者は自から正を含む。人目を以て之を言うに。

六六四九 四邊茫茫として、視る所は則ち一圓象なり、

六六五〇 萬里歴歴として、指す所は則ち一直線なり、 是を以て

六六五一 光耀の及と、

六六五二 一五四 聲臭の至は、 東西南北に徧徹す。徧なる者は圓の勢なり、

六六五三 徹なる者は直の力なり、

六六五四 是の故に大物は天地なり、

六六五五 一機は轉持なり、

(PB 434)

六六五八
 六六五九
 六六六〇
 六六六一
 六六六二
 六六六三
 六六六四
 六六六五
 六六六六
 六六六七
 六六六八
 * 六六六九
 六六七〇
 六六七一
 六六七一 1 復元
 六六七一 2 復元
 六六七一 3 復元
 六六七一 4 復元
 六六七一 5 復元

天氣地體は、同じく其の體を圓にして、而して大小を分つ、
 轉軸持幅は、同じく其の氣を直にして、而して長短を分つ、
 運轉同規は、平側を分つ、
 環守同矩は、立倚を分つ、
 衡從は同じく横にして、而して經緯の別を有す、
 本末は同じく豎にして、而して上下の異を有す、
 塊岐は同じく物にして、而して俯立の分を有す、
 邪曲は同じく理にして、而して直圓の道を有す、故に
 大物の成は、小は居り大は容る、
 短は止り長は守る、
 長矩は其の位を守りて旋る、
 大規は其の方を轉じて旋る、
 天圓は裏みて地を覆う、
 地直は立ちて天を載す、
 一は能く分る、
 一は能く合す、
 直は圓を貫く、
 圓は直を統ぶ、
 直圓は天地の靜形を成す、

（安永本からの復元。）

六六七一 6 復元

規矩は天地の動形を爲す、

六六七二

内外は分つ、

六六七三

經緯は立つ、

六六七四

外の位なる者は、圓にして容る、

六六七五

内の位なる者は、圓にして居る、

六六七六

經の方なる者は、直を以て規を爲す、

六六七七

緯の方なる者は、直を以て矩を爲す、

六六七八

直圓は靜にして體を没す、

六六七九

規矩は動にして形を見す、虚中の形なり、

六七八〇

横豎の理を成し、

六七八一

塊岐の形を爲すは、實中の形なり、

六七八二

景影は處を爲して、天物は此に居る、

六七八三

水燥は處を爲して、地物は此に居る、

六七八四

天物は塊然たり、

六七八五

地物は岐然たり、

六八八六

天物は乾燥し、虚中を曲行す、

六八八七

地物は潤溼し、實中を邪行す、

六八八九

轉中 守矩は立ちて緯位を定め、平に 西の經紀を轉ず、
環矩は倚して緯位を運し、側して東の經象を紀す、

(PB 435)

(I 450b)

六六九〇*
 六六九一*
 六六九二
 六六九三
 六六九四
 六六九五
 六六九六
 六六九七
 六六九八
 六六九九
 六七〇〇
 六七〇一
 六七〇二
 六七〇三

經なる者は東西の平圓なり、
 緯なる者は南北の守直なり、
 統ぶれば則ち豎直は自から定る、
 平圓は自から轉ず、
 分かつてば則ち守りて西轉す、
 環りて東運す、是に於て

東西は斜絡す、
 南北は出入す、氣象の錯綜する所なり。
 守る者よりして、環る者を觀れば、則ち環る者は斜なり、
 環る者よりして、守る者を觀れば、則ち守る者は斜なり、
 環りて運する者は卻つて遅し、
 守りて轉ずる者は卻つて疾し、
 持中 氣は圓にして、豎は水燥の物を通ず、
 質は平にして、横は山壑の體を列す、
 (安永本からの復元。)